

Q：言語活動の充実のためには、国語の授業でどのようにすればよいですか。

A：学習指導要領では「言語活動の充実」は、各教科等において児童の思考力・判断力・表現力等を育むための手立てとして位置付けられています。国語科では「言語活動の充実」に応え、言語活動を設定した単元づくりが見直されています。ポイントは「単元を貫く言語活動」を位置付けた授業づくりを意識的に進めていくことです。

## アドバイス：

### ①「単元を貫く」ように意識しましょう

「単元を貫く言語活動」とは、指導過程の各段階で「ここで話し合う」「ここで書く」「ここで音読する」といったバラバラの活動ではなく、単元の始めから終わりまで一貫する、中心となる言語活動のことです。例えば同じ文学作品の学習材を扱うにしても、「音読発表会をしよう」という言語活動と「続き話を書こう」という言語活動では、指導事項（身に付けさせたい能力）が異なり、単元の指導過程の各段階で設定する具体的な言語活動も変わってきます。

### ②言語活動をステップで考えてみましょう

学習指導要領解説では、言語活動の取扱いとして、3領域における指導事項を例示された言語事項を通して指導するように示されています。言語活動を位置付けた授業は、次のステップで考えていきましょう。

- ① 指導事項（身に付けさせたい能力）が何かを見極める  
↓  
→学習指導要領の内容の（1）
- ② ①を身に付けるのにふさわしい言語活動を位置付ける  
↓  
→学習指導要領の内容の（2）
- ③ ①，②にふさわしい教材，学習材を選ぶ  
↓
- ④ 具体的な学習指導の展開を考える（指導過程）

学習指導要領に示された言語活動例を参考に、その種類や特徴、目標（ねらい）との関係でなぜ位置付けるのかを十分に吟味した上で、単元を貫く言語活動は何かを考えていきましょう。

### ③教師が言語活動を実際に行ってみましょう

活動を上手に設定することは、授業の活性化を促し、子どもたちに学習への理解をうながし、意欲を喚起させることになります。そこで問われるのは、言語活動自体の「質」。

それには、教師自身がその言語活動を実際に行ってポイントを確かめることが大切です。また、教師自作の作品や実演は、子どもたちに示す何よりの見本であり言語活動のモデルとなります。

※ 言語活動はあくまでも「手段・方法」です。

言語活動の充実という思いにとらわれすぎると、言語活動が目的となり活動主義に陥ってしまう危険性があります。言語活動はあくまでも「手段・方法」であり目的になってはなりません。言語活動を通して指導事項を指導する。つまり、子どもたちに確かな言葉の力を育てていくことに言語活動の眼目があるのです。